

## アーウィン・ショウの短篇について

永井 衷

## I

Irwin Shaw (1913—)は、第一次大戦後の不況時代にその青年期を迎えた、いわゆる「戦争の世代」ウオーリーゼンネレムゼンの作家の一人である。彼をアメリカの戦後派作家の中に入れることには多少論議の余地があろうが、その主著 *The Young Lions* (1948) は、Norman Mailer (1922—) の *The Naked and the Dead* (1948), James Jones (1921—) の *From Here to Eternity* (1951) などと共に、第二次大戦後のアメリカ文学の新傾向を示すものとして早くわが国にも紹介されたところである。

Shaw の作品のうち代表的なものを挙げると *Bury the Dead* (1936), *Welcome to the City* (1942), *Act of Faith* (1946), *The Young Lions* (1948), *The Troubled Air* (1951), *Lucy Crown* (1956), *Tip on a Dead Jockey* (1957), *Two Wrecks in another Town* (1960) などが、この中で *Welcome to the City*, *Act of Faith* は他の作品と共に *Mixed Company* とついで一冊にまとめられている。従って彼には *Tip on a Dead Jockey* と共

に二冊の短篇集があり、量的にもかなりの数に上っている。そしてこれらの中の二篇は、O. Henry Memorial Prize を獲得し、一九三九年以来殆んど毎年のように *The Best American Short Stories* にも選ばれている。

Shaw の短篇の主題は、第二次世界大戦とニュー・ヨークの市井の生活に大別することができる。作品の背景も、アメリカ本国は勿論、北アフリカ、中近東、欧洲諸国にまで及ぶ広汎な地域にわたっている。彼自身が一兵士として大戦に参加し、軍隊生活をつぶさに体験した結果によるものであろう。

Irwin Shaw の作家としての出発点は、戦争に対するレジスタンスにあったとも考えることができる。処女作 *Bury the Dead* は戦死した六人の兵士たちについての劇であるが、戦争によって、自分たちの生を突如断たれてしまった彼らは、死後も埋葬を拒否するのである。このような彼の態度は、長篇の場合には、*The Young Lions* から *The Troubled Air* に至るあらゆる社会的関心となって表われている。けれども戦争を取扱った短篇の場合はこのような問題意識を露骨にあらわしているものばかりとは限らないし、皮肉にも作品としてはその方が一層すぐれていることにも気づく。*Bury the Dead* などもそうであるが、Shaw の戦争観は、ともすれば図式的、公式的な批判に墮してしまふきらいがあるからである。

いずれにしても、このような戦争否定の態度はその社会的関心と相まって、Shaw の作品の立脚地となっているし、直接たると間接たるとを問わず彼が戦争に取材した作品を数多く書いているのは、彼の career から考えて当然であらう。

“Preach on the dusty Road”<sup>\*)</sup> といった彼の傾向を明らかにしている例であらう。Nelson Wagner は戦場へ旅立って行く息子の Robert 中尉との短かい別れの物語りである。妻を亡くし、男手一つで苦労しながら息子を今日まで育てあげた父親が、息子を戦場に送り出さねばならぬことに対して感ずる悲しみと怒りがこの物語の主題となって

奇しくもピットラーと同年のこの父親は、息子を送つての帰途ふと自分の人生がまちがっていたことに気づくのである。自分は金のために一生をあぐせくと働いて来たが、二〇年間も戦争が続いていたことに気づかなかったのである。あつて息子が大きくなつて自分のために戦つてくれるのを待つていたようなものだと思ふのである。—— I've wasted my life. I'm an old man and alone and my son has gone to war and all I did was pay rent and taxes. I was playing with toys. I was smoking opium. Me and millions like me. The war was being fought for twenty years and I didn't know it. I waited for my son to grow up and fight it for me. I should've been out screaming on street corners, I should've grabbed people by their lapels in trains, in libraries and restaurants and yelled at them "Love, understand. Put down your guns, forget your profit, remember God, ……." I should have walked on foot through Germany and France and England and America. I should've preached on the dusty roads and used a rifle if necessary.

今は恋人同様にいとしい息子を戦場に送らねばならぬ老人の孤独な心境を描くにはいささか唐突に過ぎ、作者の主張の露骨さのみが意識されてそぐわないが、この作家のもつ pacifism は充分にうかがわれよう。けれども彼の戦争ものごとごとくがこのような作者の主張を押し売りするようなものばかりではない。軽い report 風な筆致で戦場の兵士たちの心象風景を描いたものもあり、却つてそういう作品の中に彼の戦争観が自然な姿で定着されていると考えることができる。

“Gunners' Passage”には北アフリカの米軍航空基地に於ける兵士たちの模様が描かれている。将校、下士官、兵など、さまざまな経歴をもつ人間が基地で輸送の順番を待ちながら交す会話が淡々と綴られてゆく。Stais はアメリ

力を後にしてから既に一年九カ月になる一九才の軍曹である。彼はギリシヤで撃墜され、二機の僚機を失った経験をもち、Arnold Whitejack は彼と所属を異にするがやはり飛行兵であり、Novak はその同僚である。Stais は軽い神経症にかかっているので、ベッドに横たわったまま帰国を待っているのだが、他の二人はこれからインドの戦場に向つて飛び発つことになっている。

兵士の会話というものは、どこの国の軍隊でもかわらぬと見える。彼らがあそんだ女の話を、恋人の話。お互の故郷や家族の話。そしてそんな話の中に僚友の最期が語られたりする。Stais はともかく、初陣の他の二人にとっては、はじめての戦場となるインドには日本の戦斗機が待っているのだ。彼らの機長の中尉はこのような二人の不安を裏書きするかのよう、突然無口の不機嫌になっている。彼は搭乗員の中に戦斗員として不適格者のいることを恐れ、而も二十二才の若いこの機長はその不満を率直に言えないのである。

突然の輸送機の到来が告げられ、彼らがあわただしく飛び立って行くまでの二人の会話がこの物語の骨子となっている。そこには悲惨な戦斗の修羅場が描かれているわけではない。先にもふれた通り、いかにも兵士らしい平凡なノスタルジアが語られているに過ぎない。けれどもよく注意してみると、このような表面的会話の裏には、戦争や軍隊から自分を解放したいと望む彼らの気持が、一つの重苦しいトーンをかもし出していることに気づくのである。

“Walking Wounded”の主人公 Peter の場合、戦争嫌悪の気持は更に具体的な姿をとっている。彼は Thipoi や Mareth の激戦に参加し、悲惨を極めた Dunkirk の撤退作戦をも経験した英軍の大尉である。軍隊生活は応召前の分を加算すれば六年に及ぶ。而もダンケルク作戦後はアフリカ遠征軍に参加し、最愛の妻 Ann とも三年前に別れたきりである。妻の顔や声を想い出そうとしても、今はそれすら判然としないし、とにかく六年の歳月は彼にとって長過ぎた。“Six years is too long for a man to expect a woman to remember him. Some one to tell Parliament

that .... Don't you think?" と呼ばずにはいられない。そして朝刊で読んだイギリスの人口増加の記事が気になってゐる。"Who're the fathers? Where're the fathers? Bloody damned news-papers."<sup>(5)</sup>

このような Peter 大尉は Cairo のナイト・クラブでアメリカ軍のパイロットたちと知り合った。彼らは翌朝イギリス経由で帰国の途につくのだが、Peter の都合さえつけば同乗してもかまわないといってくる。よろこんだ大尉は休暇の許可を得ようと、直屬上官でものわかりのよい Foster 大佐の宿舎を訪ねた。しかし大佐は既に転属した後で、彼の望みは無惨にも断たれてしまった。星空の彼方に消えて行く飛行機の行方を追いながら「明日は便りがあるかもしれない」とわびしくあきらめるほかはない。

戦争は非情である。個人の自由を奪い、束縛し、人間を軍隊という巨大なメカニズムの中へ投入してでもなく押しつぶしてしまう。平時なら善良な市民、よき夫、よき息子である人間が、軍隊では檻の中で自由を奪われた動物にも似た存在に過ぎなくなってくる。Shaw はこのような立場におかれた人間の不安や焦燥感を、その短篇の中で好んで取りあげてゐる。Peter が、「戦争が終了したら、俺は政治家になるぞ」—— "I'm going to go in for politics, I'm going to stand for Parliament. There must be somebody in Parliament who knows what a war is like, who knows that one war is enough, six years is too much" ...<sup>(5)</sup> と呼ぶ言葉も、彼が時折酒をあおって暴れ出すのも戦争のもつ violence に対する抵抗であり、Shaw はこのような表面的な現象描写の中に却つてその pacifism を一層効果的なものとしてゐるように思われる。

Shaw と戦争の関係は更に戦後にもつながつてゐることは、その近著 *Tip on a Dead Jockey* の諸作品にも明らかである。

"I'm thirty years old and I write worse than I ever did, I don't know what I'll do after war."<sup>(5)</sup> 戦時中

ジェリアに進駐していた米軍の新聞班に勤務していた assistant editor がふと洩らす言葉である。このような彼らが終戦後直面するものは何であったか、“Tip on a Dead Jockey” は戦争を直接問題とした作品ではないが、戦争が戦後の青年たちに及ぼした影響の一例を示した短篇である。

第二次大戦生き残りの、元米空軍中尉 Lloyd Barber は妻と別れ、母の諫言にも耳をかさず祖国を棄てて「パリの四流ホテル」で浪々の生活を送っている中に一つの国際的犯罪に巻き込まれようとする。彼にとっては、全てがくだらなく、退屈であった。彼もまた「戦争という奴は継続中はほんとにうんざりする。だが終つちまえば、平和はそれにも益してうんざりすることがわかるのだ」と考<sup>(6)</sup>える人間の一人である。彼にとっての対象は、アルコールと、ギャムブルとセックスしかない。

戦争中彼の機の射手をしていた少年兵は、パレルモの上空で負傷し、九死に一生を得て以来作家を志し、懷疑の底から自己完成の道を切り開こうと努力している。「僕たちの世代は危険に陥っています」「彼は手紙にこうしたためてく<sup>(7)</sup>るのだが、Barber にとってはそんな主張はフランス人でたくさんだった。「人間が矮小化して行く危険なんです。僕たちは余りにも若くして冒険をおかしてしまつたんです。その結果、僕たちの恋は普通一般の情愛の域を出ないものに変つてしまつたし、憎悪は嫌悪に、絶望は憂愁に、熱望は撰り好みに変ぼうしてしまつたんです。僕たちは、ちやちやな、だが危険の上もない余興を演ずる従順な小人の生活に甘んじているのです」——“Our generatoin is in danger,” the boy had typed in the letter on the bureau, “the danger of diminution. We have had our adventures too early. Our love has turned to affection, our hate to distaste, our despair to melancholy, our passion to preference. We have settled for the life of obedient dwarfs in a small but fatal sideshow.”<sup>(8)</sup>この射手の青年は Barber とは対称的な立場に立つのだが、Barber にとっては勿論このような立場もくだらな

ある。彼はもとの部下が、「自分に手紙なんぞくれるのを止してくれるか、少くとも別の事柄について書いてくれたらいいのに」と思う。このような Barber がパリで繰り返す無気力な生活の中に、われわれは第二次大戦後の典型的な“American exile”の姿をみるのだが、一体彼は何に絶望しているのであろうか。

妻との愛情の破綻もその一因をなしているかもしれない。作者のこの物語の意図は、どうやら別のところにあるらしく（これは作品の大きな欠点といえるのだが）この問題には具体的には答えてくれない。けれども Barber の絶望の原因は、他の作品の主人公の場合のような政治的、社会的な問題に対してでないことは確かだ。強いていうならば自己に対する絶望といえるだろう。自分に絶望する人間は、自分の心に巣くっているその新しい人生を切り開こうとする行動力はもたないものだ。Barber は、心の奥深くでは失われた生活に深い愛着をもち、何とかして正常な生活にかえることを切望しながらも、自虚的な生活の中にわずかに虚無への抵抗を見出しているにすぎない。懷疑の底から立上ろうとして努力している部下の姿をおぞましい存在と思うのは、表面的な、インテリ青年の一種のてらいに過ぎないのだ。しかし、そのためには勇氣と決断を必要とする。彼が「国籍不明の男」からイギリス紙幣の不法な空輸を依頼され、危険なこの仕事を引き受けようとしたのも、失われた勇氣を取戻し、自己の再生をはかろうとしたからではなかったか。だが所詮彼にはそれだけの勇氣も行動力もなかった。「この欧州大陸も僕には合わないんだ」苦々しい思いを抱いてフランスを去らねばならなかった彼には、いぜんとして彷徨の生活が続くばかりであろう。

自棄的で破滅的なのは、同じ短篇集の中の“Voyage Out, Voyage Home”に登場する元イギリス空軍中尉 Prichard の場合にも言えよう。肺を病む彼はスイスで療養しながらも無暴なスキーに生命の不安を忘れようとしている。ロンドンの空襲で家族を失い、僅かに残された母の宝石類が彼に残された唯一の生活費であったが、今はそれすらも売りつくしてしまった。偶々その彼と識り合った結婚問題で悩むアメリカのブルジョワ娘と婚約するが、その翌日ス

ピードの出し過ぎから樹木に激突して惨死するのである。

Barber とはい、Richard といひ、いずれの場合にもわれわれはそこに、戦争という大きな力が一人の青年に残した傷痕を、青年の人生をすっかり歪めしまった事実を見るのである。そして Shaw の戦後の作品の多くは、このように現代の若者たちを破滅的な暗い谷間にうごめく群像の一人として捉えながら、一層悲観的な傾向を示しているようである。

## II

次に Shaw の短篇の特色の一つに人種問題がある。アメリカが種々雑多な人種によって構成されている国情を考えると当然といえようが、Shaw はその作品の中にいろんな人種を登場させている。“Gunnery's Passage”のStaib 軍曹はギリシヤ系アメリカ人であるが、人種の問題にこの作家は異常なまでの関心をもっているように思える。Novak をして「ギリシヤ人がギリシヤを爆撃するなんて妙な気持だろうね」と訊ねさせているが、戦争と人種の問題もこの作家の関心をひいたテーマの一つであったようだ。“Night, Birth, and Opinion”では、四人の人種を異にするアメリカ人と愛国心の関係をアイロニカルな会話のやりとりの中に半ば戯画化している。この中で Lubbock という左翼らしいオランダ人が、アメリカ人だと主張してやまぬイタリヤ人の Di Calco にむかって“‘How will you feel, George Washington, sitting behind a machine gun with Wops running at you?’”<sup>(6)</sup> とからかっている。ジーン・ワシントンとは、Di Calco を皮肉っているわけであるが、そんな Di Calco が機銃をかまえているところへ、イタリヤ軍が突撃してくればどんな気がするかというわけである。



— Di Calcoならずとも、第二次大戦中のドイツ系、イタリア系、日系のアメリカ市民たちの或ものは、自分の母国の爆撃行に参加しなければならなかっただろうし、或いは直接母国の軍隊を敵として白兵戦を展開したことでもあろう。その心境がいかに複雑であったかはわれわれにも容易に想像できるが、Shaw はことの外人種の問題に敏感であるし、彼の作品に登場する人物を考えるとその関心のほどが充分うかがえる。そしてこの人種の問題もユダヤ人のそれとなると、その態度は異常とさえいえる。“Act of Faith”はユダヤ人への人種的偏見に対して見せる、このような Shaw の態度を知る上で重要な意味をもつ。

戦争も既に終結し、Seeger 曹長の属する師団はRhems平野に募営して帰国を待っている。彼らの間には倦怠感と軍隊嫌悪の空気が深い、Seeger を含めた三人の下士官はパリでの遊興費を作るのに知恵をしぼっている。そんな時、Seeger は故国の父親からの手紙に接したのである。

その手紙は、彼に自分がユダヤ人であることを想起させると共に、ユダヤ人であるが故に、父と弟の Jacob がいかに悲痛な状態にあるかを知らしめるものであった。Jacob は戦傷を受けて除隊になっていたのであるが、父親の手紙で、その原因は必ずしも太ももの柳散弾の傷のせいではなく一種の戦闘疲労症——combat fatigue——であることを知らされた。“I'm observing.” Jacob は古い軍服を着て自宅の窓際にしゃがみこみ、父親に向って、ガラスの破片から身をまもるように叫ぶ。“V-1's and V-2's, Buzz-bombs and Rockets, They're coming in by hundreds.”父が戦争は終わっていることを説明しても、耳をかさうとはせず、「ユダヤ人を狙った新型ロケット爆弾です」といつてきかない。時折爆弾のことを忘れたと思うと、武装した暴徒が街路をやって来る、とわめき、「奴らがユダヤ人をやっつけに来る時だ」と支離滅裂なことを口ばしる。そしてまた Jacob は強制収容所に関する記事をむさぼり読み、Tripoli で百万のユダヤ人が殺害された記事を新聞紙上で読んで涙を流すのである。

他方父親の方も、この頃では次第にユダヤ人の悪口を聞くようになっていた。Roosevelt が亡くなった日に、一人の酔漢がバーで “Finally, they got the Jew out of the White House” とわめらっているのを見たが、誰もこの男を止めなかった。そして大学教授である父は経済学の講義に抜け道を作っていることに気がついた。「自分はどのようなリベラルな著述家も、行動も称讃しながらないことに気づくし、ユダヤ人らしい名の執筆者が現存する弊害を批判している論説に接すると何故か困惑と恐怖を感じる。重要な委員会にユダヤ人らしい名がのっているのを見るのは嫌だし、貧民や圧迫された民衆や、あなむかれ、飢えているもののために戦うユダヤ人について読むのも嫌である。どうしたものか、わたしの家族が百年以上も住みついた国に於てをなせ、敵はわたしに対してこの微妙な勝利を収めたのだ——敵はわたしをして、正義を非米的だ、赤だと断言し、正義に關聯したユダヤ人の名をそれに対する攻撃の武器とすることによつて、正義から自己を疎外せしめたのである」——“And in my economics class, I find myself idiotically hedging in my lectures. I discover that I am loath to praise any liberal writer or any liberal act and find myself somehow annoyed and frightened to see an article of criticism of existing abuses signed by a Jewish name. And I hate to see Jewish names on important committees, and hate to read of Jews fighting for the poor, the oppressed, the cheated and hungry. Somehow, even in a country where my family has lived a hundred years, the enemy has won this subtle victory over me—he has made me disfranchise myself from honest causes by calling them foreign, Communist, using Jewish names connected with them as ammunition against them.”

父親の苦悩はこんな調子で長々と続いているが、Shaw は更に Seeger 自身の場合の回想を附加することによつてその主張の徹底をはかろうとする。

「ナチの焔で焼かれながら讚美歌を歌うあごひげを生やした老人たち、またガス室へ裸で押し込められて、ポーランド語やドイツ語で声涙共に下る祈りを捧げる黒い瞳の婦人たちは、アメリカにいた当時の彼にとっては非現実的な、無関係なことのように思えた」のであるが、彼と共にフィールドでフットボールの試合をした「O'Dwyerとか Wickershamとか Pooleとかいう名前の連中にとっても同様に影のような存在であったに違いない」と思う。けれどもこうして父の悲しみを打ちあけられてみると、彼が軍隊に投じて以来、見聞しながらも深く考えてもみなかったユダヤ人に対する侮蔑の数々が今更のように思い出されてくる。初年兵時代に、ボストン出身の事務員上りの兵がふと洩らした言葉。アリュエーション沖を警備中の艦長が、今度の戦争の直接の責任者はユダヤ人であり、そのために太平洋の全アメリカ艦隊の将兵が苦しまねばならないのだといったというエピソード。或いはノルマンディー上陸作戦にあたって待機中、彼の傍にいた二人の工兵の会話。彼の何れの場合も殆んど何の抵抗も覚えることなしに看過してきた。そして欧州の戦場に転戦している時にも、独軍から解放された地域で「あなたはユダヤ人か？」と訊ねられても、その質問の意味はわからなかった。その意味を理解できたのは Strasbourg で、みすばらしいユダヤ人の老夫婦に逢った時であった。老人は同じ質問をし、彼が Jew であることを確かめると妻に向って感に堪えぬかのようにいった。"A young American soldier. A Jew. And so large and strong." だから彼が Colbenz の倉庫で、ナチの親衛隊の少佐を倒し、その手中にあった Luger 拳銃を奪った時「こいつはユダヤ人を何人殺しただろう。この男を殺したことはないかも俺にふさわしいことだ」と思ったし、「かつて正義が行われ、自分がその執行者となったという漠然と定かでないしるしとして、このピストルを必ずやアメリカへ持ち帰り、せんをして家の机の上に飾っておこうと決心した」のである。この物語の結末には、それ程 Seeger にとって重要な意味をもっていた Luger 拳銃を、彼は同僚との遊興費を作るために手放すことに決心するところがある。「俺はこれから後軍服を脱いでから弾丸が雨あられと飛んで来た街路

や、フランスの地雷原で彼らを頼りにした以上に故国の街でこの二人に頼らねばならぬだろう」——“He would have to rely upon them, later on, out of uniform, on their native streets, more than he had ever relied on them on the bullet-swept street and in the dark minefield in France.”<sup>(8)</sup>二人の戦友は Seeger がユダヤ人であることを意に介しないばかりか、Seeger の拳銃に対する愛省の意味を知って、却て売却を提案していたことを撤回するからである。「信義の行為」という、title は、ユダヤ人問題をめぐるこの三人の下士官たちの友情美談ということになるかと思うが、いさゝかセンチメンタルな感じがしないでもない。

以上“Act of Faith”の梗概をみてきたのであるが Shaw のユダヤ人問題に対する態度がどのようなものであるかの一半は語り得たように思う。Seeger 父子の立場が後に *The Young Lions* の Nor Eckerman につながることは勿論である。ユダヤ人であるが故に Nor Eckerman は言語に絶する不当な圧迫をうけるのであるが、正直にいつこの問題は私には実感できかない。Seeger の“Jews collected stories of hatred and injustice and inklings of doom like a special, lunatic kind of miser”<sup>(9)</sup>という悲しみは成程西欧の小説や劇を演じて常識としてわれわれにも理解はできる。けれども先にもふれたこの作品の中のユダヤ人に対する偏見を物語る幾つかのエピソードは西欧の社会ではユダヤ人に対する蔑視と憎悪が事実このように根深く徹底していることを物語っているものであろうか。Seeger は P. X. で、ボストン出身の兵が、出征にあたって、その友人から「銃剣を手離すなよ。君が帰還したらそいつを僕たちが使うことができるからな。ユダヤ人をやつつけるのにね」<sup>(10)</sup>と忠告されたことを話しているのを耳にする。或いは、彼がノルマンディー上陸作戦を控えて待機中耳にする二人の工兵の会話は、凄惨な戦闘を目前にひかえた兵の言葉としていささか不自然といえないだろうか。一人がフランスはどこなところだろうと訊ねるのに対して相手は、「何処も同じだ。戦争中にユダヤ人が大儲けしているよ」と答えるのである。これらの執拗といえるほどに語

られるエピソードは、一人の人間の人種偏見に対する抗議というよりは、極端に誇張された一種のプロパガンダといった方が適切であるかもしれぬ。

Shaw 自身がユダヤ系であり、彼がこの問題に寄せている関心の深さを示すものと理解するならば当然でもあろうが、根本的には彼の持論の一つである「人間の尊厳」という問題につながっていると考えるべきであろう。

### III

‘dignity’の問題は、Shaw がその短篇の中で好んでとり上げるテーマの一つである。たとえば“‘The Dry Rock’”などは、この彼の主張を考えてみるのに都合な一例であろう。

ストーリーを要約すると、主人公である老いたるロシア人の運転手 Leopold Tarloff が客を運ぶ途中路上で一才した接触事故にあうことに始まる。而も、明らかに相手方の過失によるものであるにもかかわらず、相手はこれを認めようとしぬのみか、彼に対して暴行を加えるのである。憤然とした彼が警官を呼ぼうとするのをみて、さすがに慌てた相手は十ドルの賠償費を出すことを条件に、表沙汰にしないように頼んでくる。しかし頑固とも思える程に徹な老人は飽くまで告訴しようと遂に警察へ行くことになる。警察も損害は軽微であるのと、相手は損害賠償を申し出ていることを理由に、極力示談にすることをすすめるが、彼は頑としてこれをこばむ。人間は故なく他から暴力を加えられるべきではない、と Tarloff は信ずるのである。‘He insulted me. He did me an injustice. The law exists for such things. One individual is not to be hit by another individual in the streets of the city without legal punishment... There is a principle. The dignity of the human body. Justice. For a bad act a

man suffers. It's an important thing.”<sup>83</sup>

Tarloff の主張は正しいが、現代の社会はそのような素朴な原則論によって貫かれるほど単純でないことも事実である。彼の客の Fitzsimmons 夫妻はこの事故のために既に予定されたパーティーに遅刻して妻はいらいらしているし、警部にとつても、フェンダーが少しいただいたんだ位の軽微な事故のために、複雑な訴訟手続をふんでまで告訴するという老人の態度は理解に苦しむところであった。而も相手は、このような事故専門の、屈強な男を四人も呼んでいるのである。彼の唯一の味方は Fitzsimmons 氏だけである。彼は遂に告訴を断念するのであるが、この老人の悲しみが何であるかは既に明瞭であろう。人間の尊厳というものは、人を人たらしめるゆるぎない根本的要素であり、決して他から犯されてはならないにもかかわらず、他からの圧力のためにそれが踏みじられてしまうところにある。

このような主張を Shaw は繰り返したり上げぶるのだが人間の尊厳をまもり通すことは、自己をジャスティファイする根拠が存在してはじめて可能である。“Triumph of Justice” にあつては、主人公 Mike Pilato は dignity を最後までみごとに貫き通している。イタリア系のこの農夫は ‘Thursday’ という語の発音が ‘sturdarday’ になつてしまふような無知な男で、もちろん、法律の知識などあろう筈がない。証文もなしで相手に貸した三百ドルの金の返済を迫るのだが、相手はこれに応じないばかりか、法廷でも返済したと証言してはばからない。しかし Mike の場合も、正しいことは法律に優先するものであり、ゆるぎないものであった。だから彼にとつて弁護士は不要であつた。“I am right. Justice is on my side. Why should I pay a lawyer filthy, seventy-five dollars to collect my own money? There is one time you need lawyers——when you are wrong. I am not wrong. I will be my own lawyer.”<sup>84</sup>

Mike は法廷に立つて Victor と争うわけであるが、このような彼には法律上の rule も存在しない。法廷で逆上した彼は、必死の形相で椅子を Victor の頭上にかまえてその非を認めさせようとした。裁判官は暴力による脅迫で証

言しても無効である旨を警告するが、Victor は意外にもあつさり自分の非を認め三百ドル支払うことを約束し、Mike Pilato の正義は勝利を収めるのである。Shaw は *The Gentle People* (1939) の中でファシズムと戦う為には暴力も時には必要であると述べているが、正義を貫くためには暴力もまた止むを得ないというのであろう。

けれども現代にあつては、正義をまもり、人間の尊厳を傷つけられることなく生きることが至難のことである。“Monument” の主人公 Macknathon も、もうけを更に多くするためにインチキのウィスキーを使用しようとする経営者と争って、自己のバーテンとしての誇りをまもり抜くためには職をも辞する覚悟が必要であった。彼も最後には自己の尊厳を傷つけられることなく、勝利を収めるのであるが、この逆の場合もまたいかに多いことか。このような見地に立つて彼の作品を考えるならば、その大半の主人公たちの怒りや悲しみは何れも *dignity* を傷つけられ、これをまもることに失敗したことに帰納されていくといつても過言ではあるまい。特殊ダンスを踊っている最中客へその上にオリーブをのせられ、塩をふりかけられる “Welcome to the City” のダンサーの如き場合のみではないのである。Shaw が社会主義者であるかどうかは私にはわからないが、先にみてきた戦争に対する態度といい、ユダヤ人問題へのそれといい、その根底にあるのはこうした *dignity* の問題であり、そこから彼が発していることは明白である。そして彼の短篇の多くが、様々な表面的現象を描写しながらも、そこにこの作家の社会的関心への強調に向う一つの方向をおのずから反映しているのを知るのである。

註(1) *Mixed Company* by Irwin Shaw, Random House, N. Y., 1950, p. 455

(2) *ibid.*, p. 395

(3) *ibid.*, p. 390

(4) *ibid.*, p. 396

- (5) *ibid.*, p.445
- (6) *Tip on a Dead Jockey* by Irwin Shaw, Random House, 1957, p.117.
- (7) *ibid.*, p.9
- (8) *Mixed Company*, p.254
- (9) *ibid.*, p.178
- (10) *ibid.*, p.38
- (11) *ibid.*, p.40
- (12) *ibid.*, pp.40~41
- (13) *ibid.*, p.41
- (14) *ibid.*
- (15) *ibid.*, p.43
- (16) *ibid.*
- (17) *ibid.*, p.44
- (18) *ibid.*, p.47
- (19) *ibid.*, p.44
- (20) *ibid.*
- (21) *ibid.*, p.45
- (22) *ibid.*, p.415
- (23) *ibid.*, p.127